たいよう

発行所
太洋基礎工業㈱
たいよう新聞委員会

国土交通省　優良工事表彰

七月二八日、国土交通省四国地方整備局高松港湾・空港整備事務所より事務所長表彰を受賞いたしました。

対象工事は東亜・本間特定建設工事共同企業体様施工の平成二十一・二十二年度高松港海岸玉藻地区（浜ノ町工区）護岸（改良）工事で、このうち当社は専門工事（地盤改良工事）を施工させて頂き、「専門技術を駆使して品質確保・品質向上に貢献した」との評価を頂きました。

今回の表彰は当社担当部署である名古屋支店が「優良下請け企業」、現場代理人の小川主任が「優秀下請技術者」として二部門の受賞となりました。

当社の施工概要としては護岸改良工事に伴う液状化対策工事で、東亜建設工業（株）様のバルーングラウト工法により護岸延長一七一ｍにわたり、総注入量約三〇〇万㍑の薬液注入を実施する液状化対策工事でした。施工は陸上部にプラントヤードが確保できないことから、台船二隻に三二セットの注入装置を装備し、海上からの施工となる特殊な工事でしたが、元請け様ご指導のもと入念な計画を立てた結果、高品質な施工で完了することができ、今回の受賞となりました。

全国津々浦々の液状化対策注入工事に貢献してきました小川主任の努力の賜と賞賛すると共に、今後も更なる技術向上を目指し頑張れとエールを送ります。

名古屋支店副支店長　奥山　喜裕

表彰状
優良下請企業
太洋基礎工業株式会社 名古屋支店 殿
平成二十一・二十二年度
高松港海岸玉藻地区(浜ノ町工区)護岸(改良)工事
貴社は頭書の工事の施工に際し
専門工事(地盤改良工)を担当し、
専門技術を駆使され、品質確保及び
品質向上に貢献されました
よってここに表彰します
平成二十三年　七月二十日
国土交通省四国地方整備局
高松港湾・空港整備事務所長
瀬賀康浩

表彰状
優秀下請技術者
小川　義浩 殿
平成二十一・二十二年度
高松港海岸玉藻地区(浜ノ町工区)護岸(改良)工事
あなたは頭書の工事の施工に際し
専門工事(地盤改良工)を担当し、
専門技術を駆使され、品質確保及び
品質向上に貢献されました
よってここに表彰します
平成二十三年　七月二十日
国土交通省四国地方整備局
高松港湾・空港整備事務所長
瀬賀康浩

声援

四五期下期に向けて

猛暑の中、現場での作業ご苦労様です。この暑さもまだまだ続くようです。くれぐれも熱中症に罹らないように十分な対策をお願いします。八月は下期へのスタートの月です。上期の総括を行い、下期へ向けて元気良く前進しましょう。

上期は安全施工の目標であります無事故・無災害について、幸い重大災害こそ発生しませんでしたが、物損事故や不休労働災害が数件発生しています。六月の安全準備月間、七月の安全週間に於いて「安全は全てに於いて優先する」と再学習しました。下期こそ皆で協力し合い、無事故・無災害を改めて目指しましょう。尚、交通災害は貰い事故を含め一〇件発生しています。安全運転は社会人・職業人としてのマナーと位置付け、下期こそ無違反・無事故を誓い交通災害「ゼロ」を目指して頑張って下さい。

三月一一日に起きました東日本大震災被災地での復旧支援（ボランティア活動）では各支店の協力のもと、四月六日から一〇次に渡って職員の派遣ができました。頑張って頂いた職員と宿泊施設を提供して頂いた黒澤工業様には、社会で存在価値のある職場作りへ目に見える形で社会貢献出来ました事を心より感謝申し上げます。

さて、一〇〇年安心経営の要である完工高と収益に於いて、上期の完工額は目標に対し五％程度足りず達成できていません。前期支掛かり工事の減少に加え三工法日本一と位置づけてきましたＴＲＤ工事の着工遅延と液状化対策注入工事が神戸ポートアイランドの支掛かり工事と高松港他小規模工事二件で、新規着工数の少なかった事が目標をクリアできなかった要因と感じております。しかし、下期はＴＲＤ工事で既に七月末から大阪大和川現場へ乗込み、一〇月には千葉市川の外環、一一月上旬には鳥取現場への乗込みと本格的に稼動する事になります。又、液状化対策注入工事も八月末から九月上旬にかけて石川県金沢、広島県五日市、そして他二現場の受注も濃厚になってきました。又、住宅矯正工事に於きましては、五月中旬より東日本震災特需として東北・関東で本格的に工事施工に着手し、東京・静岡・名古屋の三支店で受注競争をしており、全支店の受注棟数一〇〇棟超、完工高で五億程度見込める環境と推測しています。

三工法の復権で上期完工不足を補填できると関係者の頑張りに期待しています。又、他の重点工種に於きましては、今後に期待する土壌改良工事を東京・名古屋支店で受注でき、今期末に完工出来るものと見込んでいます。杭抜き工事に於いても五支店各々が受注・完工する様になり、期待とする営業工種の一角を占める傾向が伺えます。加えて、軽量盛土を利用したＮ－ＳＰＣウォール工法が受注から漸く六月に施工開始する事になりましたミニ・ウォール工法機の活用に伴う営業戦略、一〇月に実証試験を間近に控えた浅層ラインド４工法の営業活動等も大きな課題です。

前期より始めました日曜講座、継ぐ会、オンリーワン倶楽部、自由参加の学習会のテーマ策定も課題です。気泡安定液を用いたＴＲＤ工法・気泡を用いた鉄粉浄化工法に次いで矯正工法や多孔管注入等々の研修も深めたいと考えています。

太洋の良き伝統として続けてきました永年勤続者招待旅行を下期には実施しようと考えています。該当者は職務への励みとして下さい。又、人事面に於きましては新卒者六名の採用、新任の取締役も誕生しました。成熟企業「一〇〇年企業」として「人こそ宝」とする経営方針を今後も継続して行きます。

最後になりますが、一〇月から下期に入る企業が多い中、当社は猛暑の八月に下期に入ります。大方の企業より一歩前を進んでいると自覚し、一〇〇年安心経営へ熱き思いを持ち下期へスタートしましょう。

サッカー女子ワールドカップ（W杯）でなでしこジャパンが体力に勝るアメリカを下し、世界一になりました。チームワーク以外の何者でもありません。このなでしこジャパンの元気を貰って太洋の力を結集し、目標達成に向かって頑張りましょう。

幸いな事に重大災害も無く上期を乗りきりました。創業五四年、何としても重大災害「ゼロ」、全部門・全部署黒字で改組四五期、節目の年を飾りたいと願っています。

代表取締役社長
伊藤　孝芳

共生共遊

残暑お見舞い申し上げます。

北欧の穏やかな平和な国をイメージをしていましたノルウェーの首都オスロで死者一〇〇人の連続爆破、銃乱射事件。死者四〇人を数えました中国高速鉄道の追突脱線事故。新潟、福島の記録的な豪雨は避難者四〇万人。あまりニュースになっていませんが、過去六〇年で最悪と言われ、一〇万人の餓死者、一二〇〇万人以上の食糧不足が報じられるアフリカ東部の大干ばつ。世界中で事件、事故、災害と人災、天災を含め、人も地球も病んでいるかの様相を見せています。

そんな中、亡くなる前々日に東日本大震災に触れ、この危機は必ず乗り越えられる、日本は必ずユートピアを実現できる、日本と日本人を信じている、とＳＦ作家小松左京氏が語ったと言います。我々も断じて職域にユートピアを築かねばならないと誓い合いたいものです。

下期に入りました。経営大綱で示しました三ヶ年計画も中間点。建設業大不況下の中、職域の雇用を守りたいと定めた計画です。見直すべきところは全て見直し、下期のスタートをしましょう。

七月末、往復一六〇〇㎞、新鋭機初使用の仙台ミニウォール現場訪問の後、千葉浦安の矯正工事作業所へ安全チェックと施工班の激励行をしてまいりました。特に五〇ｔジャッキ仕様の水平くん新型機が力強く稼働していました。隣接地で他社が手動式ジャッキを使って矯正工事をしていましたが、お客様には不陸時の安全品質に太洋の優位性が判って戴けた様に思え、帰路胸をはずませ本社に戻ってまいりました。

顧問　豊住　満

最前線レポート

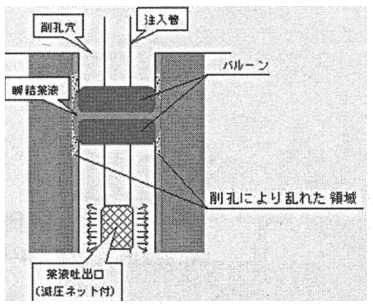
高松港にてバルーン グラウト工法施工完了

発注者
　国土交通省　四国地方整備局
元請業者
　東亜建設工業株式会社
　（信幸建設株式会社）
工事件名
　高松港海岸玉藻地区（浜ノ町工区）護岸（改良）工事
工事場所
　香川県高松市浜ノ町地内
工　期
　平成二二年一一月一〇日～
　平成二三年九月一五日
工事概要
　バルーングラウト工法
　削孔本数　四〇八本
　対象土量　二七六〇㎥
　改良球体数　九三九球
　注入量　一二九七・〇五二kℓ
　削孔機台数　三台
　注入ポンプ台数　一六台

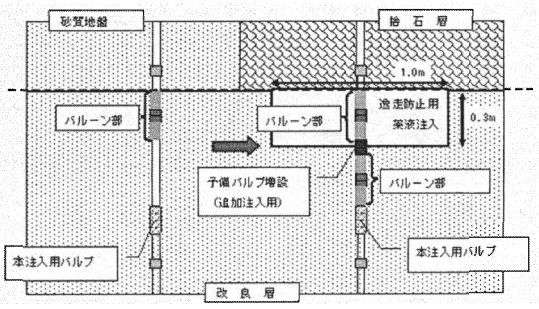
本工事は前年度に引き継いで高松港岸壁にて、バルーングラウト工法で液状化想定層に懸濁型薬液を注入して、液状化の防止を図る工事です。

本工法は液状化対策や吸出し対策が必要な砂地盤を対象とし、主に地下水以下で砂質土に対して耐久性を有する懸濁型薬液の注入を実施する場合に適用します。従来の多点注入の課題であった注入外管と地山の隙間からの逸走防止のために、注入外管にゴム製のバルーンを装備し、それに懸濁型瞬結薬液を注入することにより、逸走防止効果を向上しています。また斜め削孔時等に生じる注入管の削孔穴内の偏りも防止しています。

懸濁型緩結注入に於いては、薬液吐出口に減圧ネットを装備し、注入面積の増加による地盤の割裂を伴わない浸透注入を可能にしています。注入薬液は長期耐久性を有する無機質である懸濁型薬液を使用しています。



バルーングラウト工法概念図



薬液逸走防止概念図

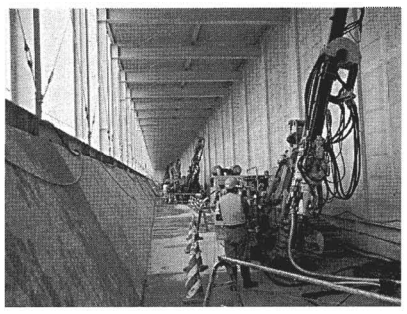
当該工事に於いて、改良層上部に捨石層が存在しているため、注入した薬液の逸走を防止するために、通常のバルーンバルブの上にもうひとつバルーンバルブ、また予備的に注入できるバルブも設けました。よって、海上への薬液の流出はまったく無く、品質を確保することが出来ました。

今回施工する際に通常と異なる点は、削孔プラント及び注入プラントを陸上に設置するのではなく海上に台船を配置し、台船上にプラントを設置することです。当然陸上とは違い、船上のため揺れが起き、陸上に繋いでいる桟橋は干満（潮の満ち干き）の差が大潮の時で約二ｍあり、台船と陸上を行き来する際は常に危険を伴いましたが、手摺り、滑り止め等を確実に設置し、ライフジャケットを必ず着用して常に安全確保を最優先とし施工しました。また、台風などで波高になり中止になることもしばしばありましたが、事故も無く無事に施工を終えることが出来ました。

最後に元請様の東亜建設工業（株）、信幸建設（株）、協力業者の双栄基礎工業（株）の皆様方へ紙面を借りて御礼申し上げます。

機械事業本部
主任　小川　義浩

海上に設置された注入プラント


注入孔削孔状況

事業所だより

東京支店　九州営業所

今年も猛暑続きで記録的な気温が各地で出ています。野外での仕事は大変ですが、夏対策を行い皆様乗り切っていきましょう。

九州営業所は佐賀市の佐賀大和インターで下りてすぐの所に位置し、住宅関連の工事については平島所長と私、熊本出張所の瀬底所長の三名で九州全域をカバーしています。

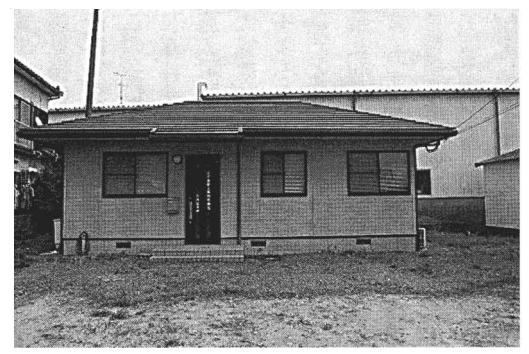
現在、営業所業務で取り組んでいる事はパソコンと複合機を連動させて経費節減を行っています。今まではＦＡＸ受信すると紙に印刷し排出されていましたが、受信データをパソコンで確認する事で紙に印刷する必要がなく、紙やカウンター料金の節約ができます。他には元請様との工事資料や作成した報告書等も電子メールで送受信しています。また、パソコンで管理している工事工程表等を携帯電話のメールへ送信する事も行っています。現場で施工情報の確認ができ、少数精鋭で効率良く対応しています。今後もＩＴを積極的に活用していきたいと思います。

次に九州営業所のある佐賀県を紹介します。佐賀県は九州地方の北西にある県で、四年前に大ブームとなりました島田洋七さんの「佐賀のがばいばあちゃん」のお陰で佐賀という場所が全国に知れ渡りました。気候は比較的温暖ですが、冬の寒さは緯度の割に厳しく、年に何回か雪が積もることもあります。

日本海と有明海の二つの海に接する県西部の唐津、伊万里、有田などが古くから陶磁器の産地として有名です。その他武雄市や嬉野市の温泉街、唐津城や呼子等の観光地が多く点在しています。また、約五〇ヘクタールにわたって遺構が残る弥生時代の大規模な環濠集落跡、吉野ヶ里遺跡も有名です。一九八六年からの発掘調査によって発見され、現在は国営吉野ヶ里歴史公園として一部を国が管理する公園となっています。物見やぐらや二重の環濠など防御的な性格が強く、日本の城郭の始まりと言えるもので、二〇〇六年に日本百名城に選定されました。当初は邪馬台国に関係する遺跡ではないかとの見方もあり、一部で九州王朝説も取り上げられましたが、現在は、九州北部にあった複数の「クニ」の一つに過ぎないのではないかという見方もされています。

建設業大不況の状況下で当営業所はお客様のニーズに対応して頑張っております。佐賀方面にお越しの際は、是非当営業所に立ち寄って頂ければ幸いです。今後もより一層当営業所をよろしくお願い致します。

大阪支店　九州営業所
係長　寺崎　和彦



社長室だより

月間ＭＶＰ賞

八月度、月間ＭＶＰ賞の受賞者が決定しましたのでご紹介します。

受賞者
　静岡支店　開発部
　　芝田　昭久　殿

住宅エコポイント終了間際の超多忙期の中、積極的に震災による液状化現象で苦しむ茨城県神栖地区に於いて遠隔地営業に尽力し、一〇件の矯正工事を受注。その頑張りと活躍はＭＶＰ賞に値するものと推薦いたします。

取締役静岡支店長
　川邊　孝行

当社の施工技術の高さ・品質の良さを広く内外にアピール出来た事は、当社にとって非常に有意義な事であり、他の範とするところです。

よってここにその功績を称え推薦致します。

名古屋支店副支店長
　奥山　喜裕

月間ＭＶＰ賞は当社職員だけでなく協力業者の皆様も表彰の対象となっています。自薦、他薦は問いません。多くの受賞者がでることを期待しています。

代表取締役社長
　伊藤　孝芳

共済会だより

☆新しい仲間

六月二八日付入社
　寺崎　良子
　　大阪支店　福岡営業所

七月一日付入社
　内海　四朗
　　名古屋支店　営業部

お願い

住宅新築および新車購入紹介と太陽光発電システムの新規事業を始めました。

皆様のお知り合いで、住宅建築の予定、新車購入計画、太陽光発電装置設置に興味のある方をご紹介下さい（本人でも可）。

紹介者には謝礼を進呈します。

連絡先は、本社総務部まで、お願い致します。

ボランティア活動報告

名古屋支店　工事部　主任　大家　拓也

五月三〇日から一週間、仙台市宮城野区のボランティアセンターにてボランティア活動に参加しました。

初日から精力的に活動しようと意気込んでいましたが、この日の仙台市は震災後初の大雨となり、電車が一時運行を見合せるなど、ボランティアスタッフ大半の方がセンターに辿り着けなかったため、中止となりました。雨の影響で道路は冠水して通行できない箇所があり、津波の影響で側溝には泥が詰まっているのか雨水が溢れ出し、道の状態が非常に悪かったので車を運転するにも一苦労でした。

震災の被害はテレビを通じて知っていましたが、実際に自分の目で見た沿岸部周辺の被災状況は映像だけでは感じることの出来ないほど悲惨で改めて津波に対しての恐ろしさと被害の深刻さを痛感しました。

ボランティア活動では当社職員を含めて一〇～一五名程度がグループで活動し、主に家屋内の家具出しと溜まった泥の掻き出しの作業を行いました。

その中で一番印象深かったのは、ボランティア活動を始めて三日目のアパート一階に住んでいる五〇代後半位の夫婦の家屋で作業していたときです。家屋の中は部屋をそのままひっくり返したほど悲惨な状況で、家主の方も元気がなく疲れきった状態の中、地震が起きた後の状況を色々話して下さいました。

話を聞いた後、作業を開始したのですが、皆の表情は硬く、暗い気分で作業しているのが感じられたので、失礼とは思いつつも冗談を言ったりして、その場の雰囲気を良くしようと心掛けました。その日の作業が終了した時には家主の方から初めて笑顔を見る事ができ、そして「震災後、初めて笑えました。ありがとうございました。」と泣きながら語られたときの言葉が今でも忘れられません。

復興にはかなりの時間が必要になると思いますが、多くの被災地の方達は前を向いて頑張っています。私たちも真心を持って支援していく気持ちを忘れず、共に歩む気持ちが大切だと感じました。

名古屋支店　工事部　主任　大家　拓也

五月一五日～二二日まで、長野支店碓田君、名古屋支店北村君の三名で第五次隊としてボランティア活動してきました。

活動内容は津波で家の中に入った土砂や瓦礫をスコップや一輪車を使って外に出す作業でした。震災から二ヶ月ほど経っていましたが、ボランティアを行った仙台市北部の沿岸部は、まだまだ人が住める様な状況ではありませんでした。

震災当初は終日のテレビ報道等もあり、感心があったのですが、ボランティアに参加した時は、二ヶ月以上経っていたせいか、関心が少し薄れていました。しかし、ボランティアに参加し、被災した方々から話を聞いたり、土砂に埋もれた車や家を見て、その土砂を掻出した事は私にとって一生忘れられない体験をしたと同時に、この震災について二度と感心を薄れさせてはならないと思いました。また、活動を終えてみて建設業に携わる立場から、今後震災復興のために何か出来る事はないかと考える様になりました。ただ考えるのではなく行動しなければとも強く思う様になりました。

今回のボランティアを通じて貴重な体験が出来ました事は、会社や黒澤工業(株)の皆様のバックアップがあったからこそ出来た事だと思います。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

最後に震災復興には、まだまだ時間がかかると思いますが、一日も早い復興を願っております。

機械事業本部　工事課　係長　福岡　慶

私は六月一二日から六月一七日までの六日間、仙台津波災害ボランティアセンターにてボランティア活動を行いました。

ボランティア活動の内容は主に被災された方の家の家具出し、泥出し、畑の上に堆積した藁出しでした。

私がまず驚いたのは新規ボランティア登録での人の多さでした。震災から三ヶ月経ち、テレビ、新聞でも記事が少なくなってきた今でも、毎日多くの新規登録の方がいました。老若男女様々な方が新品の長靴、軍手を身につけ、リュックを背負い決意に満ちた目で説明を聞いていました。その姿を見て初めての作業に不安があった私も勇気が沸いてきました。

作業に入ると思いのほか、肉体労働で辛いと思う時もありましたが、もし私たちがいなければこの作業は全て被災された方がやるしかない、そう考えるとがやるしかない、そう考えると少しでも手伝いたいと思いました。ボランティア先の家の裏庭を掃除している時、ボランティアの一人が泥まみれの洗面器を見つけ「この洗面器は要りますか」とご主人に尋ねると「私の物ではないです」と言っていました。そのやり取りを聞き、目の前の泥はもちろん、ぬいぐるみ、食器、家具全てがどこの誰の物かも分からないのだと改めて痛感し、切ない気持ちになりました。

そんな中、一緒に作業していた一般ボランティアの方々は、かなりの肉体労働にも係わらずとても明るく、男性も女性も弱音を吐くどころか、辛い顔すらしないで笑顔で作業していました。私も皆と共に頑張り、皆の気持ちで被災された方を元気付けたいと思い作業していました。

ボランティア先からセンターまでの行き帰りの道中、悲惨な状態の地域も車で通りました。三ヶ月間も放置されている畑の中に流された大量の車、大木、崩れた家を横目に運転していて私が一週間でできることの小ささを感じました。

今回のボランティア活動は色々な事を学び、感じました。人間の力の脅威、人間の力の小ささ。私ができる事は、今回の活動で感じた事を多くの人に伝える事と、学んだ事を自分の生活や仕事に前向きに生かしていく事だと思います。短期間ではありましたが、お世話になった黒澤工業（株）の皆様、ありがとうございました。ボランティアの形は色々ありますのでこれからも力になりたいと思っております。

大阪支店　京滋営業所　石川　貴志

私は六月五日～一一日の一週間、第八次派遣隊としてボランティア活動に参加しました。当社が早くから一般ボランティアとして東日本大震災の復興支援活動に参加している事は知っていたのですが、仕事の都合でなかなか参加出来るタイミングが無く、やっと一週間の空きが出来たので、是非との思いで志願させて頂きました。私自身が関西在住であり、過去に阪神大震災を経験した一人でもあります。その事もあり、満を持して仙台に乗り込んだ次第でした。

過去の記憶をさかのぼり、神戸の街で見た景色、倒壊したビルやマンション、折れた橋脚でコースターのようになった阪神高速、アスファルトがめくり上がり真っ直ぐに走れない道路など、さまざまな思い出が脳裏を横切りました。しかし、実際に見た東北仙台の景色は私を含め関西の人達が思う震災後の風景とはまったく違うものであり、少し戸惑いました。本当に何も無いのです。津波によりすべてが洗い流されていて、茫然としました。酷過ぎて・・・。しかし、落ち込んではいられません。私は何の為に志願し、大阪から仙台へ来たのか。被災された人達の心のケアと共に、少しでも明るい笑顔になれるよう私は関西人気質全開でしゃべりまくって頑張りました。

与えられた一週間の中で出来る限りの事はしたつもりですが、まだまだ満足できません。もっともっと東北の人達が笑う顔が見たかったです。

帰る車の中から、遠くなっていく仙台の街並みを見て涙があふれてきました。何か役に立てたかな。少しでも貢献出来たかな。自然の猛威を恨みます。いつまでもこんな事を繰り返すのかと。人間にはいつの時代にも、越えなければならない試練があるのでしょうか。壁を幾つ乗り越えれば良いのでしょうか。そのたびに人は繋がり合い、分かちあうのでしょうか。その先に幾つも輝く未来がある事を私は願います。そして早く、東北の人々が平和な暮らしに戻れるよう祈ります。

大阪支店　工事部　係長　太居　雅敏

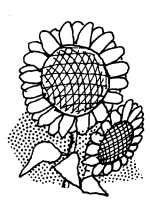
第一〇次派遣隊として六月一八日～二五日までの一週間、被災地でボランティア活動を行いました。私は主に仙台市若林地区で活動を行いましたが、海側に面しているこの地区は地震と津波で家屋が倒壊や浸水し、未だ所々立ち入りが制限されています。

活動は一般ボランティアの方々一〇名前後のチームを編成し、被災者から依頼された場所で行いました。平日にも係わらず、多くの方が活動に参加している事に驚かされました。この多くの方の協力があって、ここまで復旧できたのだと思います。震災から丸三ヶ月が経ち、かなりライフラインの復旧は進んでいますが、震災以前の生活基盤にはまだ程遠い状態です。今回の主な活動内容は、民家の屋内外や畑、側溝の泥の撤去、水没した家具等の撤去搬出を行いました。

活動初日は家屋の床上、床下の泥出しを行いました。この家のご主人が「泥出しを行っても行政の指示で未だ住む許可が下りていない。しかし、長年住み慣れた我が家を手放す寂しさと他の土地に移住する資金がないので、何とか復旧してもう一度我が家に住みたい。」と目頭を熱くさせながら話す顔が印象的でした。このご主人を含め他に活動した場所の被災者の方々は、想像もつかない程の深い悲しみを持っているにも係わらず、希望を持って一歩一歩前へ進んで行こうとする気持ちが私達にも伝わり、逆にこちらが励まされました。

恥ずかしながら活動を行う前は、東北地方の被災者の方々は大変だろうが、自分が行かなくても誰かが復旧や支援を行うだろう、という思いがあったと思います。しかし、被災地に直接行って、見て、肌で感じ活動できた事は良い経験になりました。また、老若男女や職種を問わず一般のボランティアの方々と一緒に考え協力し助け合う素晴らしさ、逆に考え方の多様性や意見の相違など色々考えさせられる事もあり、作業を円滑に行う大変さも感じました。この経験は私にとって今後必ず活きてくると思います。活動機会を与えて頂いた会社に感謝しています。

最後に被災者の方々が一日も早く復興できるよう願っております。また、私達の活動を全面的にサポートして頂いた黒澤会長様、奥様、横田様、本当に有難うございました。



長野支店　新潟営業所　本間　正和

私は、一緒にボランティア活動をする東京支店の中田課長の車で、宮城県仙台市栗生にある黒澤工業(株)様まで向かい、そこで先に着いていた東京支店の松山主任と合流しました。

一日目、ボランティア活動の拠点となる仙台市宮城野区にあるボランティアセンターに向かいました。最初の印象は、本当に地震の被害があったのだろうかと思っていましたが、海岸方面にあるセンターに近づくにつれてマンホールが浮いて地面がヒビ割れている、津波の被害を受けた車が数多く積んである空き地や折れた電線、へし折れたガードレール等、見たこと無い風景が広がっていて、地震・津波の怖さが感じられました。

到着するとセンターは体育館の中に設置されていて、入ると部屋が二つに分かれていてダンボール箱が沢山ある部屋があり、不思議に思いましたが、被災者が避難しているのだと分かりました。そこは生活空間も洗濯物も外から見え、プライバシーを感じることができない状況でした。

センターで私達は新規受付を行いました。ここでボランティアの手配や作業場所等を決め、それをチームリーダーが管理します。初日は黒澤工業の横田氏にお願いし、段取りをして頂き、以後は中田課長がリーダーとなってチームをまとめてくれました。

現地へはミニバン一台とダブルキャビン一台で移動し、基本的に六～一〇人のチームを編成し、清掃道具はセンターから支給された物を使い作業を行いました。

最初に活動した場所は海岸近くの家で、到着後すぐ目に飛び込んできたのは玄関扉や壁の一部が無残に破壊されている状況でした。一日目は床下の泥掻き、二日目は床下の泥掻きと外の倉庫の掃除、三日目に泥水が溜まった部屋の掃除と外の倉庫の掃除を行いました。

作業をしながら一般ボランティアの方と話をすると、会社が津波の被害を受けて復旧の目途が立たない中で、何か役に立てないかと思い参加している、津波の被害を受けなかった地域の方が何か力になれないかという思いで参加している等、色々な思いで活動していることが分かりました。また、この家のご主人と話をしても最初は口数が少なかったのですが、二日目以降はご主人の方から話をしてくれるようになり、被災した当時の状況などを笑って話してくれました。被災しているにも係わらず笑顔のご主人を見て、元気を与えるはずが逆に元気を貰ってしまいました。そして、いつも作業の終わりに聞く「ありがとう」の言葉に、やってよかった、という気持ちになれました。

四日目からの三日間は別の家での作業となりました。作業内容は庭の泥掻きと瓦礫の撤去でした。基本的な作業は前の家と同じですが、外での泥掻きが大変でした。元あった土は取らず、上に堆積した泥のみを取らなければならなかったのですが、一般の方やご主人からの楽しい話を聞きながら掃除をしていると一日が早く過ぎていき、疲れよりも達成感がありました。この家のご主人からもお茶やおにぎりを用意して頂き、支援するはずが逆に支援されてしまいました。

最終日の活動にこの日初めて女子中学生が参加しました。こんな小さな子でも自分からボランティア活動に参加して、人を助けることが出来ることに勇気をもらいました。

一週間のボランティア活動が終了し、活動を通じて感じたことは、震災の復旧・復興の手助けをして、勇気を与えるのがボランティアなのだと思っていました。しかし、被災者の方から勇気と元気を貰い、それは日常で体験できないような感覚でした。この普段体験できないような体験をさせて頂いた会社、お世話になった中田課長と松山主任、宿泊や昼食を用意して頂いた黒澤工業(株)の皆様方、一緒にボランティア活動に参加した一般ボランティアの方々、そして、勇気と元気を与えて頂いた被災者の方々、どうもありがとうございました。

大阪支店　工事部
井面　護

仙台市の宮城野区という場所で一週間、ボランティア活動を行ってきました。

テレビ等の報道で被災地が地震と津波による影響でどのような様子であるかを知っていたつもりでしたが、実際に現地で見る景色は全く違うものに見えました。崩れた家、潰れた車、傾いた電柱、瓦礫の山など現地へ行って初めて見た時は、驚きで言葉がでませんでした。

行ってきたボランティア活動の主な内容は、家の中に入った泥などを外に出す作業でした。始めはヘドロや生活排水、腐敗物などが混ざった臭い、泥掻きという慣れない作業だったのでとても大変でしたが、作業が終わるとその家の奥様に「綺麗にしてくれて、ありがとう、ありがとう」と何度も感謝され、今まで生きてきた中でこんなにも人に感謝されることがあったのかと感動し、ボランティア活動をして本当に良かったと思いました。その後のボランティア活動がやりがいのあるものとなりました。

また、被災地で被災者の方やボランティアの方々が、一般ボランティアの方々に混じって活動を行っている姿もあり、お互いに助けあう絆の深さや復興に対する強い志を学びました。

今回私は、建設業に従事する者が市民の為の業種であるという事を再認識しました。この業種に誇りを持って職務を行うことで、今回の体験から得たことを今後の業務に活かして行きたいと考えています。

名古屋支店　工事部
北村　晃一

六月五日から六日間、宮城県仙台市のボランティアセンターにて、震災で津波被害を被った家屋等の泥出し作業等を行ってきました。

当初、仙台市内の町並みを見る限り倒壊した建物等が無く、震災から三ヶ月近く経っているため、ある程度復旧したと考えていました。しかし、海岸に近づくにつれて瓦礫、倒壊した家屋、未だ放置された自動車などが増え始め、仙台港周辺では住宅街及び工業団地そのものが壊滅している悲惨な現状を目の当たりにして、文字通り言葉に出来ませんでした。避難所では、未だ二百名余りの方々が避難所暮らしを余儀なくされており、復旧作業が進んでいない現状を実感しました。

活動を通じ特に心に残った事は、家を失い家族を失った被災者が悲しみに塞ぎこむのではなく、復旧・復興に向けて行動していることです。マイナスからのスタートになるにもかかわらず、諦めないで家財の整理、瓦礫の撤去作業を行っている姿に心奪われ、また、被害の少なかった被災者の方々が、一般ボランティアの方々に混じって活動を行っている姿もあり、お互いに助けあう絆の深さや復興に対する強い志を学びました。

今回私は、建設業に従事する者が市民の為の業種であるという事を再認識しました。この業種に誇りを持って職務を行うことで、今回の体験から得たことを今後の業務に活かして行きたいと考えています。

静岡支店　工事部
岡平　雅人

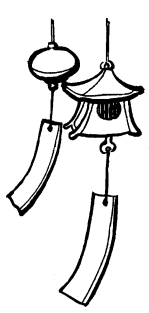
五月二一日から五月二八日までの約一週間、宮城野区でボランティア活動に参加しました。

名古屋から高速道路で宮城まで向かいました。被災地近くの高速道路は地震の影響で道が波打ってはいましたが、高速道路から見える景色はテレビのニュースで見たような光景ではありませんでした。しかし、二日目にボランティアセンターの場所を確認するため、仙台市中心より沿岸部の宮城野区へ向かうと海に近づくにつれ、津波で流された多くの家や瓦礫、車があり、まさにニュースで放送されているような状態で、あまりにも壮絶すぎて現実味が湧きませんでした。

私達は二三日からボランティアセンターでボランティア活動に参加しました。一週間を通して、ボランティア活動を行った全ての被災者の方から共通して感じたことは、どの被災者の方もとても明るく作業していました。初日に伺った家は新築で建ててからわずか三週間で被災したにも係わらず、ご主人は気丈に振舞っていたのが印象的でした。ボランティア活動する我々も被災者の方々に負けないようにと精一杯活動しました。

私達がボランティアに参加した時は、以前に比べるとボランティアに参加する人の数は少なかったそうですが、それでも多くの大学生や主婦の方が遠方から参加しており、横浜から参加していた主婦が語られた「今ボランティア活動に参加しないと五年後、一〇年後に参加しなかったことを後悔すると思い、参加しました。」という言葉が印象的でした。私自身、会社からボランティア活動をする機会を与えて頂いたことで、今回活動に参加することができました。このような貴重な体験を今後に活かしていきたいと思いました。

大阪支店　山陽営業所
川野　聖真



六月二〇日～二五日の六日間、仙台市岡田地区にて第一〇次ボランティア活動に参加しました。

黒澤工業（株）様の宿舎に到着した時は、本当に被災した地なのかと疑いました。翌日沿岸部に近づくにつれ津波被害を目の当たりにし、この中で自分は何が出来るのかと感じながらも自分に出来る事があればどんな小さな事でも力になりたいと思いました。

活動初日は、津波により浸水した家の泥出しをご主人も一緒になり行いました。休憩中にご主人から「波が一階部分まで押し寄せ逃げ遅れたが、たまたま流れてきたケーブルに捕まり助かった」と津波が押し寄せた時の話を聞き、自分や一緒に活動していた仲間も言葉を失いました。しかしご主人は「またこの地で頑張っていく」と言われ、復興への思いを感じ、勇気を貰いました。泥出しの作業が終わり、ご主人からの「ありがとう」の言葉がとても嬉しかったです。

四日目は雨により活動は中止でしたが、被災した家を解体するため、中にある家具等の移動と引っ越し作業を行い、それ以外の日は側溝に詰まった泥の掻き出し作業を行いました。側溝は津波の影響で泥が溜まり、機能していませんでした。泥の掻き出し作業は肉体的にもハードでしたが、最終日側溝に水が流れた時は、とても嬉しい気持ちになると同時に楽しく活動できたと感じました。それは、誰か困っている人の為に助け合いの活動を行っているからだと思いました。

今回の活動で人と人の繋がり、協力して助け合う大切さを感じました。これから先、この経験を活かしていき、伝えていく事も大切かと思います。被災地が一日も早く復興できる様に、今後もどんな小さな事でも協力していきたいです。

最後に、活動のサポートをして頂いた方々に感謝申し上げます。

東京支店　工事部
大島　恵介